

「勤勉革命」論の射程

赤木 誠

「働いて働いて働いて働いて働いてまいります。」

二〇二五年一〇月に自民党総裁に就任した高市早苗氏は、就任直後のスピーチでこう述べた。この発言については様々な解釈がなされたが、「卒業証書一九・二秒」などとともに「二〇二五 T&D 保険グループ新語・流行語大賞」にノミネートされ、最終的に年間大賞を受賞した。

この発言は強い決意の表れととらえられる一方で、過労死遺族からの抗議もあり、「ワークライフバランス」に逆行するものにとらえられることもあったようだ。筆者は発言の真意について関心があるわけではない。ただ、この発言は、一部の人に、勤勉な日本人像―筆者にとっては幼少の頃視聴した、栄養ドリシク「リゲイン」の TVCM のキャッチフレーズ「二十四時間戦えますか」であったが―を想起させたかもしれない。

こうした一連のやりとりの中で、ふと思ったことがある。筆者が専門とする経済史の分野でも「勤勉」というワードが注目されてきたことである。経済発展と勤勉さのかかわりといえ

ば、社会学者マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で、ヨーロッパにおけるカルヴァニズムの教義には「勤勉さ」があり、それが資本経済のエンジンとなった、と指摘したことはよく知られている。(ウェーバー一九八九)。

本稿では、こうした「勤勉」とは異なる意味合いで用いられ、近年の経済史研究で注目されている「勤勉革命 (industrious revolution)」論について、ざっと紹介したい。

勤勉革命という概念は、一九七〇年代に日本の歴史人口学者の速水融によって提唱された。それ以降様々な研究者によって「継承」され、議論がなされている。その内容について以下で整理する。

日本では、一七世紀はじめから一七二一年までの間に人口が一、二〇〇万人前後から三、〇〇〇万人にまで増加した。この人口増加によって一人あたりの耕地面積は〇・一八ヘクタールから〇・一ヘクタールに減少した。しかもこの時点で新たな土地開拓の余地が消えていたとされる。その後は分家が困難となり、間引きや中絶などの人口調整がおこなわれた。そして、それによる出生率の低下により、人口は一七二一年から一八四六年まで三、〇〇〇万人余のままで停滞した。他方、この同じ時期に一人あたり農業生産が二五%増加し、生活水準は一八世紀前半から一九世紀前半に至るまで上昇が続いた。なぜそれが可能となったのか。その理由は、「勤勉＝人間労働の強化」によって、生産性を高度に高めた、つまり「勤勉」革命があった、とされる。江戸時代の日本は、世界で最も高い単位面積あたりの生産力

を実現していた。なぜ高い単位収量が実現できたのか。第一の要因は、地力の減退を生じさせない形で、裏作によって高い土地利用頻度を実現したことにある。牛馬が引く犁では土地の深耕ができなかっただけではなく、家畜用の飼料栽培地が別に必要であった。それに対して、牛馬の使用をやめ、人間が自らそこに金肥を大量に投入すれば、地力も維持しうる。

第二の要因は、農業経営がすべて家族経営に移行したことがある。従来の譜代、下人、年季奉公人などを含む経営が、家族単位の経営に、簡単に言えば小農経営に変わった。

この変化は、長時間労働をもたらしたとされる。中世までの農民は、身分的隷属関係の下で労働に従事していた。それに対し、近世の江戸時代の農民は、中世までの身分的隷属関係から解放され、士農工商の身分のなかで上位に位置付けられた。また、農業生産は、個々の農民が自身の判断でおこなう、つまり自身が責任を負い、その成果も自身が受け取るシステムが形成された。さらに、長時間の激しい労働も、「勤労は美德、怠惰は悪徳」という倫理観のなかで美化された。農書が普及し、生産性の向上のための知恵が広く共有された。そして、何よりも重要であったのは、長時間労働によって、衣食住すべての面で、勤労によって生活が改善されたとの実感を農民たちが持ったことであった。まさに、勤労による経済成長の革命であった、という主張である。

日本をはじめとする東アジアでは、このように、土地や資本の希少性という制約を、土地により多くの労働を投入し、土地生産性をあげていく技術的・制度的工夫によって克服した。こ

れに対し、西ヨーロッパでは、牧草地の割合が東アジアと比べて高かったが、それは牧草地の飼料により家畜を飼育するためであり、輪作方法の理由でもあった。この牧草地の必要性から農場規模は東アジアと比べてはるかに大きくなければならないが、そうした規模にならない場合は少なく、農民は小屋住農か農業労働者になった。こうした要因から、農業発展の方向は、土地生産性よりは労働生産性の向上へと向かうことになり、家畜・大型機械への投資、つまり、資本が重要となったとされる。ここまでの議論をより経済学的に整理するため、速水が作成した図をもとに説明していこう。

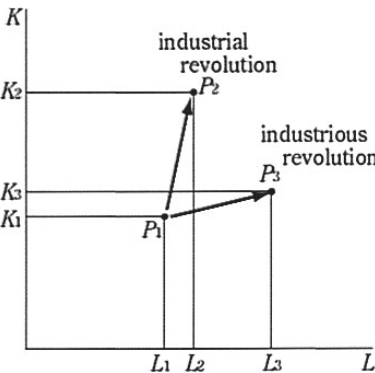


図 産業革命と勤勉革命
 出所：速水融（2003）『近世日本の経済社会』
 麗澤大学出版会、226頁。

図の縦軸は資本投入の大きさ、横軸には労働投入の大きさを示している。P₁はある生産量を示す点で、その時の資本投入は

K₁、労働投入はL₁である。P₂およびP₃は、P₁より右情報に描かれており、生産量が増加したことが示されている。そして、P₂の資本投入はK₂で労働投入はL₂、P₃の資本投入はK₃で労働投入はL₃である。すなわち、P₁からP₂およびP₃へ生産量が增大する際に、P₂は労働投入よりも資本投入を大きく増大させて生産量の増大を達成しているのに対し、P₃は資本投入より労働投入を大きく増大させていることになる。速水は、P₂が近世から近代にかけてイギリスをはじめとする西欧がたどった道で「産業革命 (industrial revolution)」にあたり、P₃は近世の日本がたどった道で勤勉革命にあたる、と速水は主張する。

速水は、勤勉革命を近世の達成として高く評価するが、その延長線上に産業革命を展望するのではなく、袋小路に入つてゆく経路（「反近代」の方向）として理解し、発展的な西欧の経路と対比した。これに対し、勤勉革命概念を受け継いだ後の世代の研究者は、近世日本の勤勉革命と近代の産業革命を連続的にとらえた。例えば、杉原薫は、資本集約型工業化（産業革命）と労働集約型工業化（勤勉革命）というように、工業化のタイプ論へ接続させ、現代アジアの工業化も視野に入れる「大きな物語」を展開するなどしている（杉原二〇一〇）。海外でも、グローバル経済史という新たな研究潮流の中で、ケネス・ボメラッツが、西欧にもその傾向が見られた、近世に共通する労働集約的な経済発展の方向性として位置づけている（ボメラッツ二〇一五）。

これまでみた東アジアと西ヨーロッパの経済発展の在り方を比較した場合、いずれの発展経路が優れていたのか、いずれが

先進的であったのかという問いが思い浮かぶ。この問いに対して、速水は、産業革命以前の二一—一八世紀の東アジアと西ヨーロッパは、いずれも生産力の拡大に成功した。その場合、土地生産性においては東アジアが勝つたが、労働生産性においては西ヨーロッパが勝つた、つまり、一八世紀末の段階でどちらが優れていたとはいえず、別の経路をたどりながら、いずれも経済発展をたげたと論ずる。従来、勤勉革命は産業革命の前段階であるとされてきた。なぜなら、両者の生産性には格段の差が存在したからである。これに対し、勤勉革命論は、勤勉革命と産業革命は別の発展経路であり、多様な発展経路の存在を主張する論拠の一つとして注目されるようになっていった。

最後に、速水とは別の、「もう一つの」勤勉革命」ともいふべき議論に触れておこう。オランダ人経済史家ヤン・ド・フリースは、二〇〇八年に『勤勉革命 (The Industrious Revolution)』と題する本を出版した。そのものずばりという表題であるが、この表題よりも「消費者行動と家計経済、二六五〇年から現在」という副題がこの本の内容をよりの確に示している。

ド・フリースは、近世の西欧において、家計の消費行動が積極化し、それが夫の労働時間延長、妻や子供の賃労働への参加など、総じて家計から労働供給が増加したことを指摘している。換言すれば、従来は自家生産していた消費財（Z財）を市場で購入できる商品に代替するという変化が起き、それに伴って人々が余暇よりも労働を愛好するようになったことである。この動きは中流の下層の少なからぬ部分まで巻き込んだものであり、余暇の減少と労働供給の増加に支えられた消費社会

をもたらしただけでそれがド・フリース説の要点である。この説は前述した「……人々が余暇よりも労働を愛好するようになった」ことを「勤勉」として捉えており、また消費サイドの動向に注視した勤勉革命論ともとれる。速水の勤勉革命論は上述したように生産サイドの議論であることから、両者の論点には少しズレがあり、ド・フリースの勤勉革命論は、内容に即すとむしろ「家計革命」論とした方が良いとの指摘もある(斎藤二〇一五)。

ここまで、経済史研究における勤勉革命論をめぐる議論について概観した。速水の勤勉革命論は、日本をはじめとする東アジアの経済発展の在り方を示すだけでなく、経済発展の多経路性の議論につながるものであった。これを一九七〇年代という時期に提唱した先駆性、また、後に国内外の多くの研究者にも多くの影響を与え、より拡がりをみせてきた点は改めて評価されるべきではないだろうか。

文献

- M・ウェーバー著、大塚久雄訳(一九八九)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店。
- 大島真理夫(二〇〇九)『土地希少化と勤勉革命の比較史―経済史上の近世』ミネルヴァ書房。
- 斎藤修(二〇〇八)『比較経済発展論―歴史的アプローチ』岩波書店。
- 斎藤修(二〇一五)『新版 比較史の遠近法』書籍工房早山。
- 杉原薫(二〇一〇)『グローバル・ヒストリーと複数発展経路』

(杉原薫・川井秀一・河野泰之・田辺明生編著)『地球圏・生命研・人間圏―持続的な生存基盤を求めて―』京都大学学術出版会。

速水融(二〇〇三)『近世日本の経済社会』麗澤大学出版会。

ヤン・ド・フリース著、吉田敦・東風谷太一訳(二〇二二)『勤勉革命―資本主義を生んだ17世紀の消費行動』筑摩書房。

K・ポメラント著、川北稔監訳(二〇一五)『大分岐―中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成―』名古屋大学出版会。